

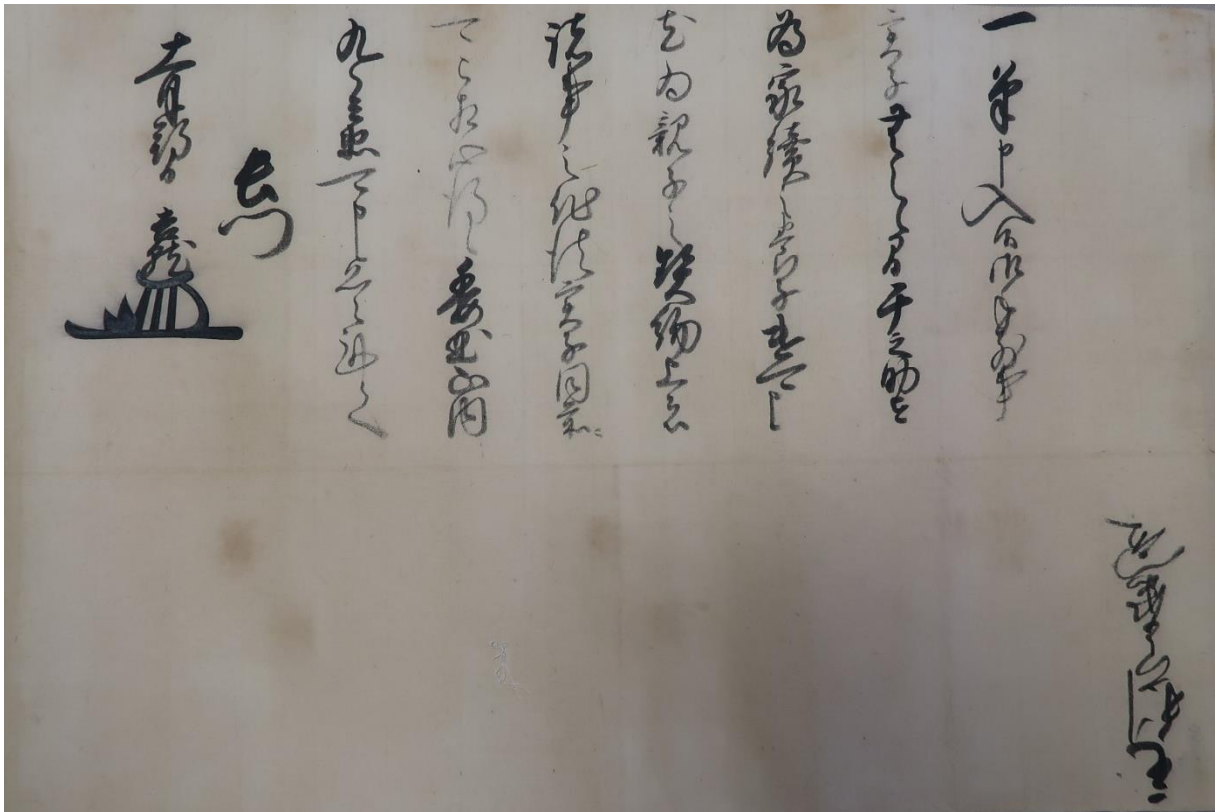
## 右田毛利家伝来文書

令和5年8月、萩藩の家格筆頭「一門」であった右田毛利家と阿川毛利家の文書、および瀬戸内の水軍で萩藩の上級家臣「寄組」にあった能島村上家の文書（重要文化財、平成27年度指定）、合計1,682点が所蔵者から山口県へ寄贈されました。これらは昭和57年(1982)と平成4年(1992)に県に寄託され、すでに当館において公開していましたが、今回、改めて県へ寄贈されることになりました。

寄贈された文書には、南北朝時代から戦国時代の大内氏や毛利氏に関する文書、江戸時代の萩藩政に関わる文書などが多数残されています。中世から近世(江戸時代)にかけての山口県の歴史を伝える貴重な史料です。

今回の展示では、そのいくつかを紹介します。

※会期中、展示替えを行います。



(右田毛利家文書 貴重 24-18 毛利吉就書状)

**【資料1】陶隆房書状（天文19年[1550]）8月24日**

**【資料2】江良房栄書状（天文20年[1551]）9月7日**

右田毛利家文書 貴重 4-25、同 26



陶隆房花押

陶隆房が主君・大内義隆を討った天文20年（1551）の事件に関する文書です。いずれも安芸国（現広島県）の有力領主・天野氏の当主であった隆綱に宛てです。

【資料1】は陶隆房が義隆との関係が悪化する中、その子息を取り立てることを隆綱に伝え、自分への協力を求めています。

【資料2】は陶氏の有力家臣・江良房栄が、長門大寧寺において大内義隆が自害したことを報じたものです。

**【資料3】加藤清正書状（年未詳）4月28日**

右田毛利家文書 貴重 8-8



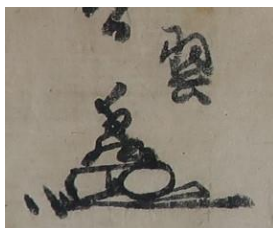
加藤清正花押

「右田毛利家文書 貴重8」の卷子には、毛利元就の7男で天野家を継承し、右田毛利家の祖となった毛利元政へ各大名から送られた書状が多く含まれています。時期は秀吉による朝鮮出兵頃のものと考えられます。

【資料3】は肥後国（現熊本県）熊本城主の加藤清正の書状です。元政の兄・穂田元清と壱岐であったことを報じています。

**【資料4】島津義弘書状（年未詳）4月28日**

右田毛利家文書 貴重 8-11



島津義弘花押

同じく「右田毛利家文書 貴重8」の卷子から。鹿児島島の島津義弘の書状です。毛利輝元からの書状を受け取ったことなどを伝えています。【資料3】【資料4】以外には黒田孝高（如水）・長政父子（豊前国〈現福岡県〉中津）、福島正則（伊予国〈現愛媛県〉今治→尾張国〈現愛知県〉清州）、小西行長（肥後国宇土）などの諸将の書状があります。

**【資料5】豊臣秀吉朱印状（文禄4年[1595]）7月10日**

**【資料6】豊臣氏奉行人連署副状（文禄4年[1595]）7月10日**

右田毛利家文書 貴重 8-18、19

これも「右田毛利家文書 貴重8」に含まれるものですが、【資料6】と【資料7】は、豊臣秀次事件に関するものです。

養父で太閤の秀吉と関白の秀次との対立が決定的となり、秀次は関白の座を追われ高野山（和歌山県）に送られてしまいます。

【資料5】はそのことを毛利輝元に報じたものです。

【資料6】は【資料5】の添え状です。豊臣政権の中核を担った人々が名を連ねています。重大事件が発生し、動揺を抑えようとしている様子も窺えます。



豊臣秀吉朱印

### 【資料7】毛利吉就書状（天和3年〔1683〕）11月1日

右田毛利家文書 貴重 24-18

右田毛利家の毛利就信に跡継ぎがなかったことから、萩藩3代藩主毛利吉就は弟の千之助を養子とすることに了承します（もちろん、父である2代藩主綱広も同意）。千之助は後に就勝と名乗りますが、吉就が元禄7年（1694）に死去したことから、実家へ戻ります。4代藩主吉広です。



毛利吉就花押

### 【資料8】毛利吉広書状（元禄8年〔1695〕）1月11日

右田毛利家文書 貴重 24-24

【資料9】で就勝が実家へ戻ってしまい、右田毛利家は再び後継者がいなくなったため、代わりに同じ家格「一門」である吉敷毛利家の毛利就直の四男久馬之助（後の広政）を養子に迎えました。それにあたって贈られた品々に、吉広が謝意を記した書状です。



毛利吉広花押

### 【資料9】織田信長朱印状（年未詳）11月26日

村上家文書5（13の8）



織田信長朱印

織田信長が村上元吉から贈られた鷹に対する返礼です。有名な「天下布武」の印が使われています。

**【資料 10】 毛利輝元書状 (天正 10 年 [1582]) 6 月 8 日**  
村上家文書 8 (10 の 4)

信長との交戦が続く中、村上元吉らが毛利方として働き、活動してきたことに感謝し、太刀などを贈っています。

また、羽柴秀吉との間で和平交渉が行われていることに加えて、京都において信長父子が死去したことも報じています。本能寺の変は 6 月 2 日に発生していますから、6 日足らずのうちに、事件の風聞が輝元の耳に届いていたことを示しています。

**【資料 11】 毛利元就書状 (年月日未詳)**  
阿川毛利家文書 1 (23 の 2)

年末を賀し、元就が孫の宮松 (後の仁保元棟→繁沢元氏、阿川毛利家の祖) に宛てた書状です。年が明けたら会いたいとも言っていて、孫との対面を楽しみに待つ元就の一面が垣間見える資料です。

〈展示期間〉

【資料 1】【資料 2】	10 月 28 日(土)～11 月 2 日(木)
【資料 3】	11 月 4 日(土)～11 月 9 日(木)
【資料 4】	11 月 10 日(金)～11 月 14 日(火)
【資料 5】	11 月 15 日(水)～11 月 18 日(土)
【資料 6】	11 月 19 日(日)～11 月 22 日(水)
【資料 7】	11 月 24 日(金)～11 月 29 日(水)
【資料 8】	12 月 1 日(金)～12 月 5 日(火)
【資料 9】	12 月 6 日(水)～12 月 12 日(火)
【資料 10】	12 月 13 日(水)～12 月 19 日(火)
【資料 11】	12 月 20 日(水)～12 月 27 日(水)